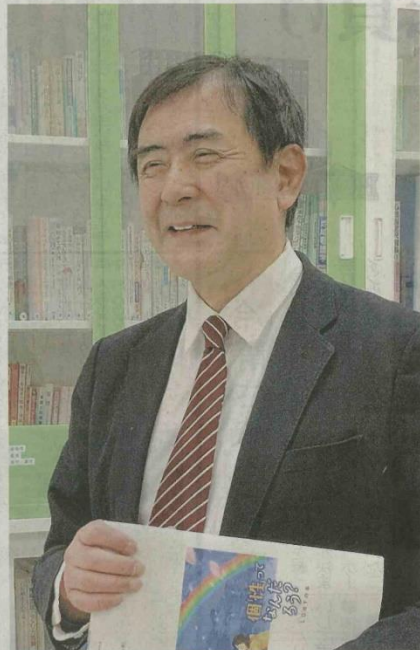


もっと広く認められていい

親子の新たな物語

精子提供と家族のかたち 20

第4部 専門家に聞く ⑤



なかつか・みきや 1961年、岡山県出身。岡山大学大学院保健学研究科教授。専門は生殖医学。生殖医療についての意識調査などを行う。産婦人科医で、生殖医療を手掛ける岡山大病院リプロダクションセンター長。同大学院医学研究科修了。著書に「個性ってなんだろう?」など。

岡山大学大学院教授(生殖医学)・産婦人科医 中塚幹也さん

皆さんは、どんな事情だったから精子提供を受けてもいいと思いますか。数年前に、日本に住む一般市民914人にアンケートで意識調査をしました。結論的に言うと、上位にきたのは「生まれつき精子がない場合や、がんの

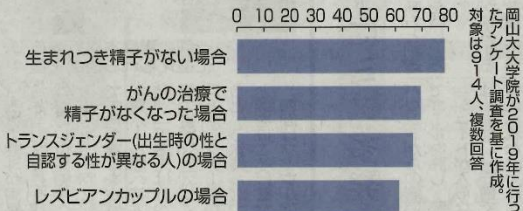
治療で精子がなくなった人たちへの支持で7、8割とかなり高く、それに次ぐ水準で性的少数者の人たちへの支持も6割超と高かったです(グラフ)。ともに半数を超えてくるんですね。世間の感覚と私の感覚は一緒でした。今の日本では誰に提供していいかを決めた法的ルールがありません。ただ、多くの医療機関がこれまでの慣例から、生まれつきや病気がよって精子がなくなった人のみに提供している状況です。

ですが、調査から分かる世間の反応からすると、現実にはもっと広い範囲で認められていいと思っています。私は研究者ですが、大学病院で不妊治療の医師もしています。その中で精子提供についての相談というのが、

は年に10組ほどあります。昔からよくあるのが、自分には精子がないから兄の精子をもらいたいという人たち。それと性的少数者で子どもが欲しいと考えている人たち。他にも、養子を見てみたい、もう一人は精子提供を試してみたい、と考えている人もいます。立場や事情、思いもさまざまです。提供精子による治療自体は私のいる病院ではできないので、相談を受けた後に実施医療機関に紹介状を書きま

す。しかし、それができるのは先ほど申しましたが、病気がよった場合に限りです。それ以外のケースでは相談者に地元に戻って理解ある病院を探してみたい」とか「ご自身の希望に応じてくれるかも」といった情報提供や助言しかできない。公表していないだけで、悩みや事情を理解して個別対応してくれる病院がありますから、そこを頼って。それが実情です。

こうした状況に追い打ちをかけるように、日本国内の医療機関では精子不足の状況(メネ参照)が生まれてい



精子提供を受けてもよいと考えるケース

岡山大学大学院が2019年に行ったアンケート調査を基に作成。対象は914人。複数回答。

国内病院の精子不足 日本では生殖補助医療で使う精子は「匿名の第三者」からの提供に頼ってきた。近年、生まれてきた人が増えるにつれて、子どもたち側から「出自を知る権利」を求める声が出てきた。匿名を条件に提供していた男性側は、子どもがいつか自分を訪ねてくるかもしれないなどと懸念。提供者が激減した。治療を行っていた国内の主要病院は、新規患者夫婦の受け入れを中止している。

トライブした人も来ます。私自身は、それはいいけども他の手があんならやめた方がいい、と助言しますが、こうした相談は後を絶ちません。そして海外渡航。数年前に台湾のある病院に現地視察を行ったんですが、結構、日本人が来ていました。診療の中で提供を受けるんです。日本人と容姿が似ているという事情もあると思いますが、台湾では法的に精子提供が認められているからなんです。

精子提供者について言えば個人としては、安全性や子どもの立場、権利が守れる態勢が担保されていなければ、どんな立場の人だとしても、思いません。親でも、きょうだいでも、匿名の第三者でも。そしてどういったケースであっても、多くの人がこの医療機関でも生殖補助医療を受けたいと欲しているのが理想だと思います。実際には、治療だけでなく精子や卵子などが冷凍保存できる体制が整っている医療機関でないといけないですね、それこそこうした施設は全国に600ほどもある。こうした医療機関が治療の受け皿にならなければ、いつか期待して

連載への感想、意見などを募集しています。〒380-8546 長野市南県町657 信濃毎日新聞社文化部「親子の新たな物語」係 (ファクス026・236・3194、メール kurashi@shinmai.co.jp)

本連載「親子の新たな物語 精子提供と家族のかたち」の過去記事は、ニュースサイト「信濃毎日新聞デジタル」でも読むことができます。